被虐待児の発見以後1ヶ月間の成長
Development of the neglected child during a month

岐阜大学大学院教育学研究科科目等履修生　天野菜穂子
岐阜大学教育学部学校教育講座（心理学）　宮本　正一

key word：被虐待児，成長，社会性

はじめに

「自宅付近で裸で残飯をあさっている子どもがいる」という電話連絡が子ども110番に入り，子ども相談センターの職員が警察の立ち会いのもと，その子どもの家にはいると，便，尿が散らばる乱雑で不潔な室内に，3歳,1歳（本児），6ヶ月の男児3人がいた。母親は不在。3人ともに保護され，救急車で小児科病院に搬送された。残飯をあさっていたのは，本児の3歳の兄であった。

本児は，高度の脱水状態，栄養不良が著しく，皮膚は乾燥し，排尿なく，ひどくやせ，体動，発語もなく，呼びかけに対して目を向けるだけ。洋服の汚染がひどく，アンモニア臭が漂っていた。1歳10ヶ月であるが，入院時の体重は，4.8キログラムであった。

さて，本児のような子どもを被虐待児というのであるが，虐待の定義は，親や保護者や世話する人によって引き起こされた，子どもの健康に有害なあらゆる状態をいう。そして虐待には，下記に示す4つの分類がある(小林，1998)。

身体的虐待：外傷の残る暴行，あるいは生命に危険ある暴行

ネグレクト：（養育の拒否・放置・怠慢）遺棄および衣食住や清潔さについて健康を損なう放置

性的虐待：近親姦，あるいは年長者による子どもの性の乱用

心理的虐待：以上を含まない，その他の極端な心理的外傷を与える行為

本児への虐待は，ネグレクトに相当する。虐待を受けた子どもの健康状態，精神状態には，下記の事項があげられる(小林，1998)。

子どもの健康状態

① 外傷が多い
② 体重増加不良
③ 病気の放置
④ 清潔保持不十分（皮膚，口腔）
⑤ 発達の遅れ（身辺自立は早い）
⑥ 情緒行動問題
⑦ 予防接種少ない
⑧ 乳児検診少ない

子どもの精神状態

発達遅滞，寡動，寡黙，過食拒食，悪夢，睡眠障害，夜尿，遺尿遺糞，多動，攻撃性

① 心的外傷後ストレス障害
② 対人関係の障害（無差別的愛着と極端なデタッチメント，虐待関係の反復傾向）
③ 攻撃性
④ 自己概念の障害
⑤ 解離性障害
⑥ その他（偽成熟性，食べ物への執着，境界性人格）

発見直後の本児の症状としては，うつろな表情，誰にでも無差別的に手を出し抱かれるが，いっさい表情が無く，食べ物に対しての異常なまでの執着があげられる。

はじめて児と対面したときの観察者の記録を下記に示す。

X月15日

午前中に病院2Fの一室でT婦長に抱かれた児を見る。「小さい，なんて小さい」というのが第一印象。5000グラムあまりの体重。2ヶ月の赤ちゃんの体重とほぼ同じくらいである。児は，目全体がぼんやりとした黒であるかのような焦点の定まらない，うつろな表情をしていた。その部屋に集まったのは，婦長，こども相談センターの職員，ケースワーカーなどの人々であったが，次々とその人達に手を出し，抱かれていく。その手の出し方もいたってスローモーでうつろである。筆者（天野）も抱いたが，人間の子を抱いているという感情をもち得ない。胸をべったり合わせて両手をだらんとして，全体重を預けているという頼りなげな様子で，膝の上に児の両足を立たせ，踏ん張らせようとしても，足を折り曲げ，腰砕けのように膝の上で座り込んでしまう。何か類人猿の赤ちゃんを抱いているような，…肌着の下のやせた体が，小刻みにふるえているような感じがした。児自身は，おびえて極限状態に置かれているのだが，我が身を守るため，見知らぬ他人に自分を預けてしまわざるを得ない無力な状態のように思える。感情の表出は全く見られない。あえて比喩するのならば，**ハーローのさる**のあの表情が先ず脳裏に浮かぶ。髪は伸び放題で，女の子と見まごうほどである。

昼時に再び児と会う。児はT婦長の膝の上でお昼を食べていた。パン類，ご飯，プリン系統の物なら食べるが，野菜，果物類は受け付けない。婦長が皮を剥いたバナナを持たしても，関心を向けるでもなくぽとんと落としてしまう。おそらくそういうものを食べた経験の欠落と，未経験の物は受け付けないという防衛本能によるものではないかと思われる。しかし，そういった自分が手を付けない食べ物であるにもかかわらず，看護婦さんがお盆を引こうとすると，手で制止し，小さな拒絶のうめき声を上げた。

外来に児の兄が診察のために来たので，児と兄を引き合わせる。児はT婦長の膝に抱かれ，兄は子ども相談センターの人に抱かれて対面したのであるが，お互いがお互いの目を一瞬合わせ，両方から手をゆっくりとさしのべ合った。そして児はほんの少しだが，ほっとしたような表情をうかべた。

しかし，これ以降，退院に至るまでに，児は，乳幼児発達スケールによれば，X月15日には，総合発達年齢2ヶ月総合発達指数32であったものが，X月29日には，総合発達年齢11ヶ月総合発達指数50，さらにX＋1月7日総合発達年齢1歳2ヶ月総合発達指数64にまで達していく。また児にとって，特別の愛着の対象となる人物が存在するまでになる。

本報告は，入院中約1ヶ月間の児の生活を，日を追いながら観察することによって，発達の回復と対人関係の発展について得た知見である。

事例の概要

主訴：極度の飢餓状態で，発語，表情表出，泣くことすらが無く，発達遅滞が著しい。

本児の臨床像

注射を打たれるとき，「痛い」という表情が無く，抵抗もない。誰彼となく手を出し抱かれるのだが，抱かれてもそこで落ち着かず，また次の人に手を出す。動作が緩慢であり，全体的に子どもらしいあどけない雰囲気がない。気持ちの交流を図ろうとしても，本児が，それをシャットアウトしているような，人に抱かれてはいても人を受け付けない冷たさを感じる。

見立ておよび治療方針

1才10ヶ月であるが，発達の遅れがどの程度かわからないため，乳幼児発達検査を実施しながら，その時点でできなかった発達課題に取り組むとともに，その中で，言葉かけや，スキンシップ，歌などを通して，児にはたらきかけていくことにする。それによって，先ず人に対する恐怖を除き，安堵感が得られるようにすることに眼目をおいた。したがって，治療方針としては，本児を全面受容していくことによって，治療者や病院という環境に安心感を持つことができるように援助しながら，心身の休養並びに発達を図っていくこととした。

構造としては，1日おき（月・水・金）のプレイセラピー60分を，心理外来の部屋，プレイスペース，近くの公園，病院の周辺で行った。

面接経過

第1週（X／15，X／17，X／19）

下記にX／17，最初の本児とのプレイセラピーの記録を掲載する。

X月17日

午後2時半に病棟訪問。児は昼寝中。彼は横向きで寝ていた。

午後4時再び訪問。ちょうど昼寝から覚めたところ。おむつを換えてもらい，ズボンをあげてもらっていた。ベビーオールから，上下の入院患者用のパジャマに着せ替えてもらい，髪も男の子らしくカットしてもらっていたので，赤ちゃんくささが消え，それよりも驚いたのは，上体は看護婦さんに預けているのだが，両足を踏ん張り，立ち上がった状態でズボンをあげてもらっていた。いささかなりと脚力が付いてきたものと思われ，食べ物をきちんと食べさせてもらえるということが，このたった二日間の大きな変化に非常に寄与していることに驚かざるを得ない。また黒目と白目の境目がはっきりし，顔から霞がかかったようなぼんやりとした表情が無くなっていた。

さっそくA看護婦がおやつを用意してくださる。私が膝の上に彼を座らせ，Aさんがスプーンで口に運ぶ。ピーナツバターを塗ったパンケーキにミルク。本児はツバメの雛のように大きな口を開ける。ケーキを食べる合間にAさんが手際よく注射器で口の中にミルクを押し込む。そのタイミングが合わないとき，彼はううんと言って結構やんちゃな声を出し文句を言うように抵抗した。彼の腰の当たりを支えながら，一昨日に比べると彼の腰骨が，背骨をしっかりと支えており，背筋の存在を意識することができた。食べ物が彼の腹に落ちていく感じが指でわかった。彼の腹部に手を当ててみると，腹に張りが出てくるように思える。しかし3分の2以上，ケーキを食べたところでも，児は食べ初めと同じくらいの大きな口を開ける。おなかが膨れてきたという感覚がないのだろうか，それとも食べることができるときに必死に食べておかねばならないという強迫観念があるのか，食べるペースが衰えず，いくらでも食が進みそうな気配なのだ。とうとうAさんが食器を取り上げた。彼は明らかに「取り上げるな」というような悲鳴を上げた。しかも取り上げられたのとほとんど同時くらいに声を上げた。15分ほどの食事中に，Aさんは，スプーンを手に持たせようとしたり，ぐい飲みを両手で持たせようと試みられたが，彼がそれらを支えるように指を開かず，結局できなかった。

おやつを終わり，プレイスペースへ児を抱いて向かう。彼の腰を後ろから支えるように私の膝に坐らせ，用意してきたおもちゃをかごから出す。

はじめはがらがら。耳元で静かにならすと本児が手を伸ばしてくるので，握らせてあげると，すぐに投げ捨ててしまう。熊や象のぬいぐるみを手に持たせても，すぐにはらいのける。ミニカーも同じように投げ捨てる。そして手を前方に何かを求めるようにさしのべていく。そこで，彼の手のひらを支えるようにして私の手を出し，握りしめてあげると，「うん」と声を出し振り払う。そして上体を私の方に向け，胸を合わせて抱けというような感じで求めるので，体の向きを変えて向かい合わせに抱くスタイルを取るが，決して目を合わせようとしない。そしてまた何かを求めるように手を外に向ける。そこでまたその手を握ってあげると，ぱっとふりほどく。体は私に任せているが，そこから先は入り込めないバリアがあるように思えた。

次に，彼に見えないように彼の背後でオルゴールをならしてみる。音が鳴り始めると体をびくんとさせたが，初めだけで後は無表情のままである。

立ち上がり，外の景色を彼に見せる。「お山だよ，お山だよ」と声かけをするが，反応はない。

それから本棚の上にあるいろは積み木のところへ行き，一枚ずつ名前をいいながら彼に渡す。「ライオンさんだよ，ガオーッ」「キリンさんだよ，パッカパカ」「犬がいるよ，ワンワン」「ねこさんだよ，ニャー」。児はその度に受け取るのだが，下に投げ捨てる。そういうことを遊びとして，楽しんでいるようにはどうも思えないのだが……。そして落とされた4枚の積み木を拾い上げ，「どうぞ」と言って彼に渡す。彼が受け取ると「ありがとう」を私が言う。すぐに彼はその積み木を捨ててしまう。また拾う。「どうぞ，ありがとう」を数回繰り返した。

そのうち児が，自分が下に落とした積み木を私の肩ごしからのぞき込むように見始めた。そこで彼を，床におろしてお座りをさせると自分の手を伸ばして積み木を集め，私が手を出すと私の手においてくれる。「ありがとう」と言って4枚全部受け取ると，今度は彼の手に一枚ずつ積み木をおいてあげる。「はい，どうぞ」「ありがとう」を繰り返して。これを数回行ったところで，彼は二枚ずつ手に積み木を持って打ちならした。彼と私の間でやりとりらしきものが成立したような感じがした。

児はその後，また積み木をぽんぽん捨ててしまう。積み木は彼がお座りの姿勢で手を伸ばしても拾えない位置に飛んでしまった。すると彼は腰の重心を横にずらし，肘から下を床につけて抱腹前進のような姿勢ではいはいをして，1メートルほど移動して積み木を拾った。足は全く動かさず，手の力だけで移動した。

そのときＮＨＫの「いないいないばあ」が始まり，彼は両手で上体を支えた姿勢でそれをじっと見始めた。初めて見るという様子ではないので，以前家庭でそれを兄と見ていたのではないだろうか。続いて「お母さんといっしょ」が始まる。ストーリィ性があるミド，ファドのお話やしんすけのコント劇も興味をとぎらせることなく見続ける。

リトミックや最後の体操の時は，お姉さん，お兄さんの動きに合わせて手足を動かしたり，体を持ち上げたりしてあげ，どんな表情をしているのかとそっと顔をのぞき込むと，うっすらと口元がほころんで，目の表情が穏やかなものになっていた。

そこで，どうもウンチ。詰め所に駆けつけ，看護婦さんに彼を渡す。ふと手の辺りに温かみがあるので見ると，彼の手が私の人差し指を握っていた。

侮れないが，児の心はネグレクトという悲しい仕打ちにもかかわらず，思いのほか，可塑性の強いものであるのかもしれない。

このセラピー終了後，筆者は，児に対して最初に感じた対人関係をシャットアウトするような冷たさは徐々に氷解していくのではないかという，小さな希望を持つことができ，安堵したのを覚えている。

さらに2回目のプレイセラピーの記録を続いて示す。

Ｘ月19日

12時40分頃，病棟に行く。児は寝ていた。二日前に比べるとほっぺがふっくらとして，顔が大きくなったような印象を受けた。

15日（月）に初めて会ったときは，顎がとんがり，髪は伸び放題で，体の大きさは乳児なのに，とても大人びた感じだったが，羽二重餅のようなほっぺになった彼は，ばんざいをして仰向けで寝ていた。二日前，詰め所の脇の小さな部屋で，横向きで寝ていたときに比べて，今，寝ている場所は，お医者さんや看護婦さんが頻繁に往来し，医療機器がそこかしこで電子音をたてているのに，彼のベットの中には，手放しの安心感が漂っていた。12日（金）に発見され，病院に入ってきた彼に，二日間添い寝されたＴ婦長は，今の彼を，あのときのあの子だと認めることができるだろうか。

午後2時前に病棟へ行く。児は昼食を取っていた。今日のメニューは，鮭のムニエルタルタルソース添え，炒めた人参となすの甘辛煮，サヤインゲンのおひたし，ご飯。鮭そのものをよく食べ，タルタルソースの，タマネギ，パセリ，ゆで卵のみじん切りでは，タマネギ，パセリをいやがるのではないかと心配したが，なんとソー

スそのものもむしゃむしゃと食べていた。人参となすは柔らかく煮てあり，よく味がしみているのがよかったのか全部平らげた。とりわけなすを要求し，皿が空っぽであることを彼に見せて，納得させねばならなかった。サヤインゲンは少々堅く，薄味だったので，案の定，口元まで持っていくと「ウウン」と言って，手で払いのけた。ご飯はあまり食べなかったが，K看護婦がのりたまをかけてくださると，おちゃわん半分ほど食べることができた。食事中，何度もスプーンを握らせようと試みたが，彼は手を振り払い，自分で食べることをいやがった。一昨日は，どれだけ食べても大きな口を開けていたのだが，今日は3分の2ほど食べた時点で，スプーンを振り払い，「ごちそうさま」のサインを出してきた。

食後，おしっこ。顔はふっくらしているのだが，おむつをあけてみると，やはりやせている。睾丸の大きさが異様に目立つ。

おしめを換えてから「おばちゃんと遊びに行こう」と手を出すと，私の横にいたK看護婦の方に行きたそうにそちらへ体を向けた。私が抱き上げると少し不満げに体をよじった。誰にでも手を出していたのに，彼の心に**特定の人**が出現し始めたようだ。

2時過ぎにプレイスペースへ。最初に「お山の熊の子」を歌ったが，私の口元を見たり，聞き入っているという様子がない。

缶の中からミニカーをとりだし，「はい，どうぞ」を繰り返して，一つ一つ，児に渡すと，一昨日同様，投げ捨ててしまう。しかし前回と異なるのは，自分で散らかしたミニカーをまた缶に入れたところだ。いろは積み木を渡すとそれも「ウウン」と不機嫌な声を出し，振り払う。今日は高這いの姿勢で遊ぶ。そして移動するときも，足の力を充分使って，上半身がかなり上に上がっている。エレベーターから人が出てきたり，入り口で見舞客が手を洗ったりすると，すぐにその方へ体を向け，じっと見つめる。人の動きには，敏感である。

そこへK看護婦がやってきた。

児はKさんのところへ這っていき，Kさんの膝にちょっと触れてから向きをこちらに変えたので，おままごとの玉子をあげる。彼はマジックテープをはがそうとがんばって，二つに割った。「できたね」と二人でほめたが，表情は変わらなかった。そして両手に一つずつ持っている玉子の片割れを双方向に投げ捨ててしまう。ひとつは自分で這って拾いに行く。もう一つを隠して知らん振りしていると，こちらへ這ってきて捜し，「ウン」と言って，もう一つを要求するような声を出した。そこで，私が彼の両手を会わせて，「おちょうだい」をさせ，手の上に隠していた片割れをおいてあげると，怒ってそれを振り払ってしまった。キャベツを同じように与えると，マジックテープを外し二つに割って，もう一度くっつけようと試みていたが，テープのある面を合わせず，外側と内側を合わせるのでくっつかない。かちゃかちゃやっていたがうまくいかないので，小さなかんしゃくを起こし，キャベツをぶん投げてしまう。

そこで私の股で彼の上体を支えるようにしてお座りをさせ，彼の足の間にデュプロのボックスを入れてあげると，中から固まりをとりだしてはバラバラにするという遊びを一生懸命やりだし，とうとうボックスの中を空っぽにしてしまう。そして，「ウン」と声を出し，私に固まりを作るように要求を出してきた。そこで5ピースほどの色とりどりの固まりを作って，「はい，どうぞ」と彼の手の上に載せてあげる。Kさんが「ありがとう」と言って，合いの手を入れてくださる。

固まりは，結構堅いものもあり，多少ゆるめて手加減してあげたが，堅くてはずせないものは指の向きを変えて力を入れており，器用な指の動きができていた。この遊びはとても集中して15分ぐらい続けていたので，Kさんが，「このおもちゃ，おうちにあったの?」と児に話しかけられた。

その時，小三くらいの男の子が，プレイ・ルームにやって来て，ミッキー・マウスマーチが流れる自動車のおもちゃをスウィッチONした。

児の背後で音がしたのだが，彼は体をびくんとさせて振り向き，そこへ這っていって，おしゃべりを始めた。それは，乳児の発する喃語のような幼い響きのあるものではなく，あくまでもおしゃべりに聞こえた。

彼はスィッチを操作しようとしていたが，うまくいかないので，私がやってあげると，音が出たときは，はっと驚いて「やかましいね」というようなおしゃべりをし，音がやむと「静かになったね」というような感じのおしゃべりをした。そして，それを，小3の男の子に向けて話しかけているようなときもあった。

男の子が行ってしまい，入れ替わりに女の人がやってきて，「ぼうや」と声をかけると，這っていって，その人におもちゃに差し込むプラスチック製のCDを「はい」と言って，差し出した。

後から婦長さんに訊いたのだが，「はい」は時々言うそうである。

今日，わかったことだが，本児は，赤ちゃんが好むようなオルゴールのような優しい音は好まず，アップテンポの音楽が好きなこと。また，がらがらのような物より，ブロック遊びのようなくっつけたり離したりする操作性のあるおもちゃを好むことがわかった。体は生後数ヶ月くらいだが，彼は知的な操作の必要な遊びを好み，明らかにおしゃべりをする。彼を赤ちゃん扱いしてはいけないのだと感じた。

入院1週間を経て，児の大きな変化をまとめてみる。

① 病院という環境に安心感を持つようになってきている。……万歳の寝姿
② 食べ物への執着が徐々に薄らいできている。
③ 対人関係を持ち，物のやりとりができるようになってきている。
④ 特定の愛着の対象が出来始めている。……K看護婦

第2週（X／22，X／24，X／26）

続いて第2週の記録を示す。

X月22日

昼過ぎに病棟のナース・ステーションへ行くと，盛んにおしゃべりの声が聞こえる。声の主は?，と辺りを見回すと，ベビー・カーに入った児だった。S看護婦が，デスクで仕事をするかたわら，彼をあやしていた。児は，Sさんに，「相手をして，遊んで!」と言わんばかりに，手足をばたつかせ，アピールの声を上げていた。Sさんが，それをなだめるようにおもちゃを渡すのだが，ぽいっと捨ててしまう。しかし，以前のような投げ捨てるという具合ではなく，おもちゃを投げては，Sさんの反応を伺い，拾ってくれないかなというような声を出し，拾ってもらえると，「大成功!」と言わんばかりにうれしそうな声を出す。その声にほだされて，Sさんが，彼の顔に，自分の顔を近づけると，児は顔に両手を当てて，「ばあ」をしたのである。

Sさんから児を受け取り，プレイスペースへ。彼を，私が足を組んだ，その真ん中に入れて，鉄きんで「チューリップ」をひくと，終わりまできいて，私の方を振り向くように「うまい」と言った。さっそく彼を引き寄せて，「おばちゃん，ほんとにうまい?もう一度うまいっていって。う・ま・い，う・ま・い……」と，「うまい」の口型を見せながら，アンコールを促したのだが，「うまい」はただ一度であった。

彼はそっぽを向いて，いろは積み木のボックスまで高這をして行ってしまった。18日よりさらにお尻の位置が高くなっているように思えた。そして，振り向きざまに「はい」と行って，私に積み木を一枚渡してくれたのである。

それから，さらに彼は本箱のところまで這っていき，絵本を取り出して，本を開き，指でページを繰った。

絵を見ているという様子は全くないのだが，明らかに本を読むという操作をしており，それを楽しんでいる様子だった。誰か他の子どもが絵本を見ていたのを，観察して模倣しているものと思われた。さっそく児に適当と思われる「いいおかお」という題名の絵本を選び出し，読んであげるが，ページを繰るという作業に関心がある彼には，内容への興味はわかないよう

にみえた。

そこで，本箱の棚に彼の手をかけさせて，つかまり立ちを試みたのだが，足の裏を内側にきゅうっと曲げてしまい，立たせることはできなかった。それで，彼の脇を支えて，歩かせることにした。彼は自転車のペダルを踏むように，足をぐるぐる回して，足の裏を床につけようとしなかったが，足を5回ほど回転したところで，足の裏を床につけて歩き出した。歩き出すと足の裏がきれいに伸びて，足の裏全体が床に着くようになった。そこで「一，二，一，二」と声をかけ，さらに歩かせると，彼の目が明らかに私の目を捉えた。彼とのアイ・コンタクトが初めて成立したのである。そして彼は，かけ声に合わせてさかんに，おしゃべりを始めたのである。それは，彼にとって，「ご機嫌」という状態であったと思う。

おやつの時間になり，看護実習生の人が彼を連れに来た。彼に「バイ，バイ」をしたが，バイバイはできなかった。

後で，Y婦長さんとお話をしたのだが，児は，誰にでも抱いてもらおうと手を出していたのだが，応じてくれそうな人にしか手を出すことをしなくなったそうで，また普段応じてくれる人でも，その人が今は相手をしてくれそうなのかどうか，見極めるように顔をのぞき込むことをするそうである。その点が，何だが不憫なようであり，切ない気持ちにさせられるのであるが。「いない・いない・ばあ」ができるようになった件については，土曜・日曜にかけて，看護婦さんや実習生の人達が入れ替わり立ち替わり「いない・いない・ばあ」を彼に働きかけてあやしてくださった結果，児が獲得したものであるらしい。

X月24日

児を心理外来の部屋に連れてくる。はじめての場所なので，どうも落ち着かないようで，だっこをおろしてあげたのに，小机の縁をつかまり歩きを数歩した後，すぐに振り向いてだっこをせがむ。だっこするとドラエモンのカレンダーを見つけて，しっかりと指さし，そこへ行くように催促して，足で私の腹を小さく蹴る。前から知っているので興味があるのか，それともドラエモンの色や線に興味があるのか，不明なのだが，一生懸命見ている。ドラエモンの歌を歌ったが，それには全く関心を示さない。

ボールペンを握らして，紙にめちゃ書きをさせたが，力の入れ方が上手ではなく，また意欲もわかないようで，すぐにボールペンをはなしてしまう。しかし，ボールペンのキャップを外し，先を紙にこすりつけたので，ボールペンが書くものであることは認識しているようである。いつも書き物をしている看護婦さんの横にいるので，観察学習しているらしい。

たくさんおもちゃを出しても，遊びに入らず，だっこばかりせがむので，病棟に帰ることにする。

病棟のナースステーションに戻って，看護婦さんに彼を渡す。とたんに饒舌になって，うれしそうな声を出す。おうちに帰ってきたという安心感が表情に出ていた。

第2週の児の発達をまとめると

① 特定の愛着の対象に続き，自分の居場所の出現（病棟のナースステーション）
② アイ・コンタクトの成立
③ いない・いない・ばあの獲得

第3週（X／29，X＋1／1，X＋1／3）

第3週の記録を以下に示す。

X月29日（月）

児と戸外に出るため，婦長さんがお茶やお菓子を持たしてくださる。帽子や靴も履かせてあげたが，いやがるので，ベビィカーの日覆いをつけて外に出る。彼の顔は，完全に陰になっているのに，目をしっかりと閉じ，両手で押さえつけている。外の光があまりにもまぶしいようだ。風も吹いているのだが，風に向かって目を開けることも嫌らしい。

公園に着くと，幼稚園の子ども達の声がした。数人の子ども達が，遊具を使って，ターザンごっこをしている。児は，その声に反応して，声を出し，子ども達見たさに，少しずつ目を開けて

いった。そして，ターザンごっこをしている子ども達の動きに合わせて，だっこしながら走ってあげると，きゃっ，きゃっと喜んだ。

次にその子ども達が，鳩を追っかけ始めた。そこで児を抱きながら，子ども達の後を走ると，鳩を目で追いだし，ゆびさしをして，「あっちへいけ」，「こっちへ行け」のサインを出す。

その子ども達が，水筒とお菓子で休憩をとると，児も婦長さんの持たせてくださった塩煎餅とお茶を10ccほど飲んだ。塩煎餅を袋ごと渡すと，袋の口を開けてほしいと催促するように声を上げた。ところが，児が食べかけのお煎餅を落としてしまい，それを鳩が突っついて，たちまち食べてしまった。児は「ウウン」とうなり声をあげ，目の前の鳩の大群に身を乗り出して，せんべいを取り返そうと飛び出して行こうとする。まるで，空を飛べそうな勢いなので，笑ってしまった。

子ども達が，タイヤブランコを始めたので，児も乗せてあげる。鎖を両手でしっかりと握りしめてタイヤの揺れを怖がることがなかった。そしてしばらくたって，私が「降りる？」と訊くと，はっきりと「降りる」といい，私の方に体を向けて，手を伸ばしてきた。「降りる」という言葉をきちんと理解できていることがわかる行動だった。

それから児をベビィカーにのせ，公園内の散歩道を歩いた。そこで，おじいさんとおばあさんが歌の練習をしていた。おじいさんは鳥羽一郎，おばあさんはふじあや子の曲だった。その歌に出会ったとき，児はベビィカーに背もたれしていたのだが，むっくり起きあがった。明らかに聞いているというそぶりだった。筆者は今までいろいろな童謡を歌ってきたが，まったく関心を示さなかったのに，彼はじっと聞いていた。病棟への帰り道，今度は筆者が，鳥羽一郎の兄弟船を歌ってみた。彼は動きを止めてじっとしていて，歌い終わるとため息を付いた。なんだか切なくなった。病棟に戻った。

プレイ・ルームの床にお座りすると，さっそくベンチで休んでいる，入院患者のおばあさんのところまで這っていき，積み木を「はい」と言って，渡した。おばあさんが，児に積み木を「どうぞ」と言って渡されると，「あとう」と行って受け取り，また「はい」と行って積み木を渡していた。私が「おばちゃんにもちょうだい」と言って手を出すと，児はそれに対して，「いやだ」と言った。

先ほどの「降りる」といい，「はい」や「あとう」「いやだ」ということばの一音一音が，はっきりと発音されていた。何よりの驚きは，「ありがとう」「いやだ」という言葉の獲得である。

そこに，Kさんがやってきて，児の前に坐り，「お帰り」というと，児は，お母さんに「今日は，〇〇へ行ってきたよ」と報告するように，おしゃべりをした。Kさんが，児が電話遊びをするようになったことを話してくださった。受話器を持って，「もしもし」といい，なにやら話しているのだそうだ。きっと看護婦さんが電話をしているところを，観察しているのだろう。私が，DQテストを取り出し，ボールペンで，Kさんの話をメモしはじめると，それをくれと言い，ボールペンでめちゃめちゃ書きを始めた。先週の水曜日にやったことを覚えていたらしい。持ち方がとても上手になり，筆圧も今日の方があった。

おもちゃの方へ移動するときは，膝をつかないで，手と足の裏を使って，よつばいの姿勢になった。また手だけを持ってあげると立っていることができる。

患者の小学生の男の子が，シャボン玉を吹いていた。児はそれを手でつかもうと，手を伸ばして，ふれてはなくなってしまうので，不思議そうな声をたてていた。それからその子が持っているストローとコップをよこせというようなおしゃべりを始めた。男の子が，「赤ちゃんは飲み込んじゃうからだめ」と言って，行ってしまうと，児は不満そうだった。

それからおやつ。メニューはマグカップ1ぱい分くらいのゼリー。最初は食べさせてもらい，少しおなかが落ち着いてきたところで，スプー

ンに少し乗せてもらうと，自分でそれを口に運ぶことができた。かなりのハイペース。食べる合間合間に「おいし」ともらす。素早くスプーンにゼリーを乗せないと，催促の声を出す。しまいには，カップに直接手を入れて食べ出した。ゼリーのぷよぷよした冷たい感触を楽しんでいる。食べ終わると，Kさんが「からっぽ」と言ってカップを見せ，児は，それをのぞき込んだ。Kさんが，「ごちそうさまは？」と促すと，全くしない。そこで私が彼の手を合わせ，ごちそうさまのパフォーマンスをさせる。以前なら「キー」と声を出して拒絶するのに，今日は受け入れた。べたべたになった手を洗面器の中で洗ってもらうのも気持ちよさそうだった。

自分で食べる。汚くなった手はきれいにする。児は，Kさんにきちんとしつけられて，快適そうだった。

私が帰ろうとすると，看護婦さんが，「『バイバイ』は？」と児に促した。児は，私の方は，全然見ないで，手のひらを回転させ，「バ，バ」と言った。バイバイもできるようになっている。

X＋1月1日

K式検査のため，子ども相談センターの方が来る。場所は心理外来。児は，Kさんと共にやってくる。この前，児と私とで，心理外来の部屋で遊んだときとはうってかわって，児は饒舌で，積極的であった。

先ず，おやつの水ようかんを食べる。おしゃべりをしながら，落ち着いた様子で，スプーンで上手にようかんを口に運ぶ。Kさんに「あれ」とドラエモンのカレンダーを指さし，すごくはしゃぐ。

K式検査は，午後4時半から始めて，6時頃に終わったが，児は，1時間以上私の膝をいす代わりにして，坐り続け，いろいろな課題をやった。中でも彼が好きだったのは，カップ問題で，じょうずに3つのカップを重ねることができた。判定によると，1歳前後の発達水準であるという。出された課題に対して，児が困っているとき，優しく声かけをしたり，応援をしてあげるKさんの存在に，児が安心して活動している様子がよくわかった。最後に，Kさんの膝に坐る児を写真に撮る。カメラ目線になった彼に恐れ入った。

X＋1月3日

ナースセンターに用事で行くと，車椅子に坐っていた児が，私を見つけ，猛烈なだっこのアピール。「ごめんね，今日は，遊んであげられないの」と答えた。医学部の学生さんが，代わりに相手になってくださる。彼が児に，ホワイトやボールペンを渡すのだが，ぽいぽい下に落としてしまう。しかし，落としてから下を見て，「どこいった？」と医学部の学生さんに尋ねている。2語文が出ている。

第3週の児の発達をまとめると

① 指さし

② 「はい」「あとう（ありがとう）」「いやだ」「おいし」「ババ（バイバイ）」「あれ」の言葉の獲得

③ 2語文の出現「どこ，いった」

言葉を使って，人とコミュニケーションを取ることができるようになってきている。

第4週（X＋1／6）

第4週の記録を以下に示す。

X＋1月6日

病棟の看護婦さんが，お昼寝からさめた児を外来に連れてきてくださる。さっそく児を抱き取ろうとすると，「いやだ」と言って，看護婦さんにしがみつく。

外来のベットにつたい歩きする児をベットの上に坐らせる。恐がりはしなかった。ミニカーの缶を渡すと，ふたを取ってくれと要求し，ふたを取ると，中から，トラックを取り出し，荷台を上に上げたり下げたりしてしばらく遊んだ。それから，座った姿勢で前かがみになり，幼稚園バスをベットの上で走らせた。

児はその時，「ブッブー」と盛んにつばを飛ばして，つぶやいていた。2週間前には，ミニカーを渡しても，捨ててしまうだけだったのに，音をまねながら自動車を動かしていく遊びができるようになっている。遊びの質に変化が起き

ている。それから児は，自動車を裏返し，人差し指で車輪を回していた。

ボールペンを渡すと，キャップを外して書こうとするので，ボールペンに対して「書くもの」という認識ができている。

病棟のプレイスペースに移り，「おかあさんといっしょ」を視る。ハッチ・ポッチステーションのグッチさんのショウタイムでその日は，ダイアナ。児の脇を後ろから支えて立たせると，音楽に合わせて，両手をぐるぐる動かし，体全体でリズムを取っている感じ。そっと脇の支えを外すと，音楽に夢中の彼は気づかない。そのまま20秒ほど自力で立っていることができた。

次に子ども料理番組に変わり，ババロアが画面一杯に出てくると，口をもごもごと動かした。「もうすぐ晩御飯だね」というと，私に抱かれてきたので，ナースステーションに戻る。おしっこをぐっしょりしていたので，Kさんにおむつを換えてもらうのだが，泣いていやがり，寝返りを打って，おむつかえに抵抗する。以前はされるがままになっていたのに。

第4週の発達をまとめると，

① 遊びの変化。見立て遊び，ミニカーでブッブー。

② 「されるがまま」から「抵抗」へ

さて，うつろな表情で，食べ物への執着のみを奇声を出すことで表出していた児が，看護スタッフや看護実習生が働きかけて下さった結果，アイ・コンタクトが成立し，「いない，いない，ばあ」ができるようになるなど，情緒面に飛躍的な改善及び進歩が見られた。

また上手にスプーンを使って，プリンなどを口に運んだり，コップを持って飲んだりすることができるようになっており，看護スタッフの方々の根気強い働きかけの成果であるといえよう。

児は，誰彼となく人好きの面があるが，とりわけ，主に世話をしてもらっているK看護婦に抱かれていたり，そばにいてもらえるときは，表情に安心感があり，おしゃべりも多く，行動が大胆になる。したがって，児にとって，K看護婦がきちんと彼の心の内に位置付いているものと思われる。

乳幼児発達スケールにおいては，6月15日に総合発達年齢2ヶ月総合発達指数32であったものが，6月29日には総合発達年齢11ヶ月総合発達指数50に到達していた。また7月に入ってから，言語的な発達が著しく，さらなる発達指数の上昇が期待可能と思われる。7月1日に行った，K式発達検査の結果も，児を1歳前後の発達段階にあると判断している。運動面では，20秒ほど立っていることが可能になっており，つかまり立ちをしてからのつたい歩きもかなりできるようになっている。退院日（X＋1月8日）には，総合発達年齢1歳2ヶ月，総合発達指数64に達した。

そこで，乳幼児発達スケールをもとに，1ヶ月に及ぶ児の発達の様子を振り返ろうと思う。

表1　乳幼児発達スケールにおける発達の様子

	総合発達指数	発達年齢	情緒的・身体的発達
第1週（X／15）	10	2ヶ月	不安が強く，眠りが浅い。添い寝。食べ物への執着。無表情。
第2週（X／24）	32	7ヶ月	つたい歩き。ものを介してのやりとりが可能。アイ・コンタクトが成立。いない・いない・ばあの獲得。おしゃべりさかん。
第3週（X／29）	50	11ヶ月	「バイバイ」のパフォーマンス。べたべたになった手を洗う。ランク付けをした対人関係。
第4週（X＋1／8）	64	1歳2ヶ月	スプーンの使用。コップで飲む。5語以上の言葉，2語文の獲得。立位，つかまり立ち，つたい歩きがかなりできる。

図1から見てわかるように，第4週（X＋1／8）において，表出の領域では，発達年齢が生活年齢とほぼ一致するところまでに達している。ところが理解領域は，10ヶ月程度の発達年齢で，伸びが頭打ち状態となっている。当然クリアするべき課題である「歌うとじっと聞き入り，母親の目や口を見つめる」「聞き慣れない音や声を怖がる」「新聞を持ってきてなどの簡単な指示に従う」「ブーブやワンワンがわかる」などが達成されていない。しかしながら，これらの課題は，家庭にあってこそ達成されるべきものではないだろうか。ナースステーションでは頻繁に電話が鳴り，医療機器が電子音をたてている。また大勢の人の出入りが1日中続く。ひとつの音に落ち着いて聞き入るということができないし，児にとってあまりに不特定多数の人が多すぎる。ふつうの生活なら当然経験する自動車や，犬，ねこに出会うということもない。筆者は病院での育児に限界を感じざるを得なかった。

また運動領域においても，児は立位まではできても，歩き出すことはとうとうできなかった。児が療育されていた場所は，ナースステーションである。児にはいはいをさせたり，つかまり立ちをさせて伝い歩きをさせることができるような環境ではない。歩き出すことができなかったというのは当然のことだろうし，もし児が歩

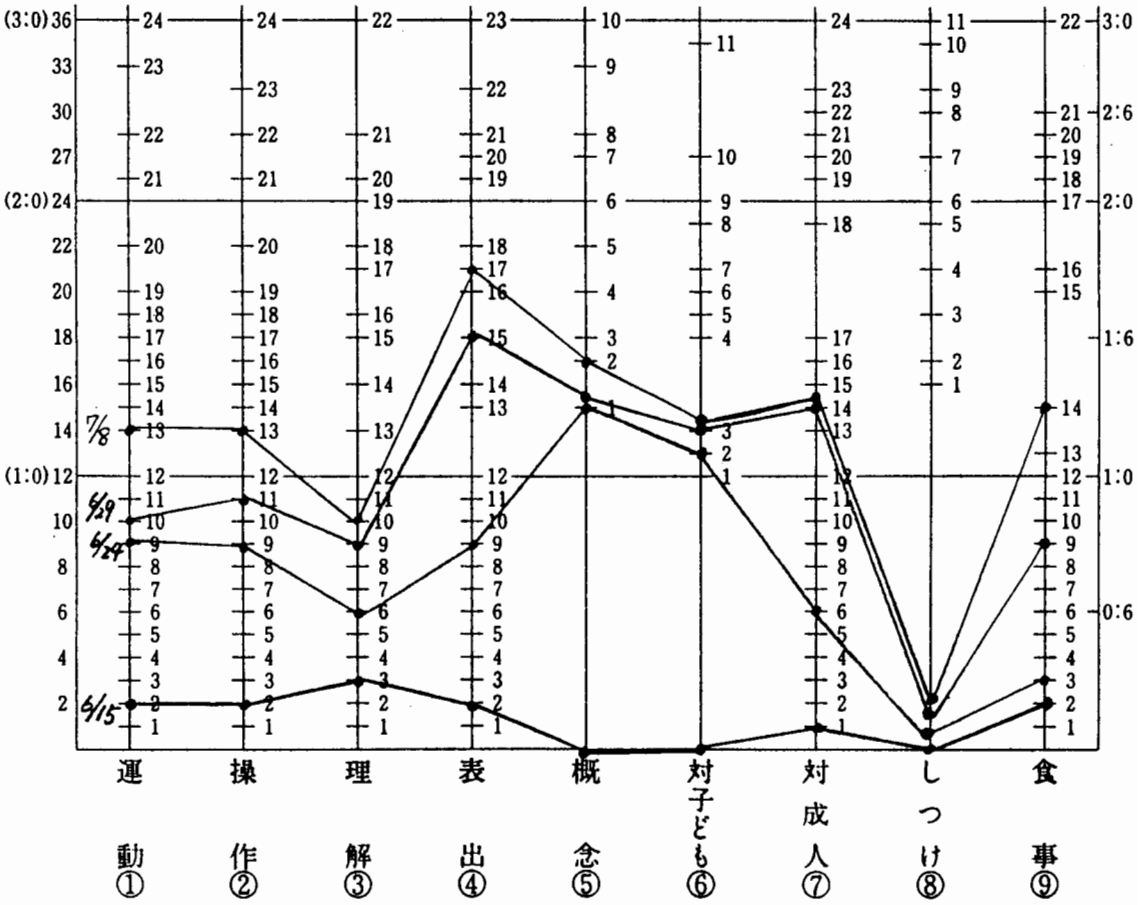

図1　KIDS（TYPE T）による被虐待児の発達の様子　縦軸は月齢

き出すことができたとしたら，ここでの児の療育にはかなりの危険が伴ったといえるだろう。

考　察

4週間の入院生活で，このような経過をたどった児は，とてもその回復，成長が早かったケースといえるかもしれない。

おそらく児が，1歳10ヶ月と幼く，体力・成長・情緒の面で，ひじょうに可塑性に富む時期であったことが幸いしたのであろう。高橋(1990)も，生涯発達心理学の立場から，理解し記憶する能力は成長につれて増加していくので，その出来事が後の人生に影響する場合も，幼児期より児童期，それ以上の方が大きいと述べている。

また大勢の看護スタッフが関わっているが，児に中心的に関わる人が決められ，K看護婦を支援する形で他の人達が児と接したことがよかったと思われる。

筆者は，この様子を「大家族の中での育児」としてイメージする。母は，忙しいので，常に側にはいないが，誰かの目があり，手があり，児と関わる。しかしながら，眠りにつくとき，食事をするとき，痛いことをされるときなどの肝心な場合には，いつもK看護婦が付き添ってくれる。このことから，児は自分が大切にされているという思いを持ち，心の安全基地を築いて，自らに対する自尊感情を高めていったのだろう。

また，高橋(1990)は，乳幼児が愛情の対人関係を拡げていく場合，現在持っている愛情の対象人物と似ている人と交渉を持っていくと述べている。当然のことではあるが，彼に関わった人達は，K看護婦と同様に白衣で女性であったことが，児に安心感を持たせたのであろう。
退院の日，おむつ替えをいやがって，やんちゃをした姿には，ひとりでは生きられぬがために，見捨てられることをおそれて，媚びるがごとく，誰にでも抱かれていた児の不安そうな様子はまったく感じられなかった。

神奈川県立子どもセンターの治療プログラムによると，虐待された子どもは，

① 人を試し，試される時期
② 人に対する期待が芽生える時期
③ 再度の試しをする時期
④ 自己イメージの変化が起きる時期

をたどるという(小林，1998)。

本児の経過を，上記の①から④の時期に分け見直すと，発見当初の誰彼となく抱かれるが安心感が無く，眠りも浅い，食べ物に対して強い執着を表していたX／12～X／15までの時期が①にあたると思われる。

その後，ばんざいして眠るようになり，ものを「はい」と言ってあげたりもらったり，「いないいないばあ」をしたり，アイコンタクトが成立したX／17～X／24が②にあたるだろう。また前後するが，「遊んでほしい」いう気持ちを表すために，さかんに声を出したり，わざと物を落として，他の人の気を引こうとするようなことが表れた時期が③であろう。

そして自分にとっての安全基地を築いて，自分は大切にされているかけがえのない存在なのだという気持ちを形成していったのが，④の時期にあたるものと思われる。

この経過を，小林(1998)は，子どもが，安全・安心を保障されて心身の休養を図り，全面受容されることを通して，人は信じてもよい存在であること，自分は尊重される存在であることを体験していく過程であると述べている。

おわりに

子ども時代の不幸な経験が，多かれ少なかれ思い出せず，覆い隠されてはいても，様々な困難をもたらすという印象がある。

そういった子ども達は，物事をやり遂げるための根気に乏しく，学業は不振で，大人に不信感を持ち，心を許せる友達がいない。これは，筆者が，親の蒸発によって施設入所した子どもと接したときに抱いた感じと一致している。そしてそのような子どもが，親になったとき，親

としての自分が描けず不適応に陥って過ちを繰り返してしまう傾向にある(小林, 1998)。

児が今後，どういう成長をしていくか，……自分の環境を認知し，自分の生い立ちに思いを巡らすことができるようになったとき，大きな課題に直面するだろう。

しかしながら，大変不幸な子ども時代を過ごしていても，我が子と安定した愛着関係を取ることのできる母親が存在するという知見をBowlby(1993)は示している。これらの母親の一人一人の特徴は，彼女らが，子ども時代のたくさんの拒否的で不幸な出来事を述べるにも関わらず，それぞれが自分についての話を流暢に，そして首尾一貫した方法で語ることができるということである。そしてその話の中で，彼女の経験の肯定的な面には，正当な場所が与えられ，否定的な経験のすべてと統合されているように思われた。彼女たちは，子ども時代の不幸な経験を，またそのことが長い間自分たちにいかに影響を与えたかを，そしてなぜ彼女たちの両親が，彼女たちをそのように扱ったかということを，よく考えてきているように思われた。実際，彼女たちは，自分の経験に折り合いをつけているようだった，とBowlbyは，紹介している。

児が，「いない，いない，ばあ」ができるようになると，そこにいた看護スタッフが，歓声を上げる。かわいらしい表情が見られるようになったという報告があると，カメラ好きのドクターが，そのチャンスを待って，カメラを構える。

このような関わりが，児の達成感や，自分がかわいがられ大切にされている存在なのだという自尊感情の成長に大いに寄与しているものと思われる。

物事に当たり達成感を得る過程において，他者からの援助があったり，たまたまできたときに，それをとても喜んでもらえることは，自分に対して大きな自信を持って生きていくことにつながるだろう。

その自信は，何か困難にぶつかったとき，それを打開するためによく考えるという作業を生むのではないだろうか。

児が，今後，このような体験を持つチャンスに恵まれ，そういう環境づくりをしてくれるような人物との出会いを願ってやまない。

引用文献

小林美智子　1998　子どもの虐待の実体と対応　子どもの虐待防止ネットワーク・愛知

Bowlby,J.　1993　二木武監訳　母と子のアタッチメント－心の安全基地　医歯薬出版
(Bowlby,J.　1988　A secure base; Parent-child attachment and healthy human development.Basic)

高橋　恵子　1990　生涯発達の心理学　岩波書店